

「歴史を“科学的に”考える～木簡を素材として～」

曾我雄司

【抄録】 2010～2012年度、高校1年生SLPⅡ「自然と科学」後期の社会グループで取り上げた授業の紹介である。木簡の読解を通して、木簡の出土文字史料としての性格、とりわけ物質資料としての性格を理解させることを目指した。この学習を通じて、厳密なデータおよびその吟味の上に物事を考える科学的な態度について、生徒に気付かせ、身につけさせる機会とした。

【キーワード】 SLPⅡ 木簡 出土文字資料 文字史料 物質資料 科学的態度

1. はじめに

本稿は、高校1年生のSLPⅡ「自然と科学」後期の社会グループの授業のひとつを取り上げたものである。SLPⅡ全体の構成やSLPⅡ「自然と科学」の取り組みは、本紀要の該当箇所および過去の紀要の該当箇所をご参照いただきたい。筆者は2010～2012年度、高校1年生のSLPⅡ「自然と科学」後期の社会グループの授業を担当してきたが、そこでは「科学的態度」を養うことを主眼に、歴史史料の取り扱い方を題材として取り上げ、史料から歴史像を正しく組み立てることの大事さを考えさせる授業を展開してきた。

その題材の一つとして取り上げたのが、木簡である。木簡は、出土文字史料といわれる。文字の読解によって歴史像形成の素材となる文字史料としての性格と、遺跡からの出土遺物の一つとして遺跡の性格を考える素材となる物質資料としての性格を有しているのが木簡である。一つの史料から文献史学・考古学それぞれの知見を導きだせること、逆に文献史学・考古学のそれぞれの知見により複眼的な歴史像を描くことができることは重要である。またえてして木簡に書かれた内容に注目が集まることが多いが、出土した物質としての性格に注目することも重要である。「なぜ木に文字を書いたのか」という問いは、「木に文字を書くことにはどんな利点があったのか」という問いにつながる。木簡は、そういう発想の転換を必要とする史料でもある。

改めて文献史的な面からみれば、木簡は、史書などのように残す意図があって書かれたものではない。ゆえに史書などには見えない社会の日常の様子を垣間見ることができるし、飾り立てることのない真実を見ることができる。そして木簡は、今日も新たに発見されている史料である。今後も木簡の発見は、新たな事実を明らかにし、歴史像をより豊かにしていくだろう。

この授業では、木簡の読解と共に史料的性格を理解させることを目的とした。その中で歴史学の現段階の水準

を知るとともに、そして様々な角度・分野から複眼的に、また発想を転換してデータを見ることで、様々な情報を引き出せることを理解させることをねらった。

SLPⅡという合科授業における授業案であるが、日本史の通常授業の中でも実践可能な内容と思われるので、教科研究の章に入れさせていただいた。

2. 授業の展開

(1) 授業の用意

プリント2種類を用意する。

プリントAは、表左面にワークシート、右面に平城宮・平城京の地図を入れた。授業の内容の記録および木簡の出土地点などを確認するために用意したが、大型スクリーンなどにうつすことができれば必ずしも必要ではない。

プリントBは、木簡の写真を掲載したものである。平城宮および藤原宮木簡の写真を8つ、両面に印刷した。写真は木簡学会編『日本古代木簡選』（岩波書店、1990）のものなどを用意した。

他に生徒の木簡積読作業の補助として、国立文化財機構奈良文化財研究所編『日本古代木簡辞典』（八木書店、2008）を用意し、必要に応じて回覧させた。またプリントの画像の不鮮明さを補うために、『日本古代木簡選』の該当箇所のコピー、奈良文化財研究所HPの木簡データベース（<http://www.nabunken.jp/Open/mokkan/mokkan2.html>）の画像データを用意した。また生徒に電子辞書を持ってこることも指示した。意味を確認するだけでなく、タッチパネル機能を活用しての積読も可能だからである。

(2) 指導案と留意点

この授業は、社会科グループのみを対象に行った。木簡の積読作業を織り込んでいるので、小グループを作るとよい。また授業としては2時間分（50分×2コマ）をあてた。

授業のねらいは、(1)木簡が出土文字史料であり、文献史学・考古学の両分野の交差領域にあることを理解する、(2)木簡の積文を読み解くことで興味関心を高めるとともに、木簡にどのような内容が記されたのかを知る、(3)木簡の物質的な側面およびそれに応じた用途に注目させることを通じて、複眼的にデータを扱うこと、時には発想の転換が必要なことに気づかせる、の3点である。

導入及び展開1の①②は、生徒の知識の確認である。「木簡とは、木に文字を書いたもの」という範囲を出ることはほぼない。ここで「なぜ木に文字を書いたのか」という問いを発しても、「紙は当時貴重であったため」という解答が返ってくる。その時は「半分は正解だけど・・・」とあって、答えは乞うご期待とする。なお木簡が最初に発見された（何らかの意図をもって木に文字を書いたことが認識された）のは、1966年のこと、また現在までの総数は約37万点で、北は北海道から南は沖縄まで出土していない都道府県はない。

③は、「木を長期保存するためにはどのような環境が必要か」という問いから始める。どういう条件だと木は腐るのか、などヒントを出すと「乾燥した環境」という答えが出てくる。中国西域の乾燥地域である敦煌や楼蘭などでは、木簡が発見されている。しかし日本は湿潤な気候である。木を腐らせるバクテリアや紫外線から遮断される環境は、日本においては泥や粘土などによって常に湿潤な状態に置かれる、地下水の豊富な土地という逆説的なものである。この状況下、木簡は木の内容物が溶け出して水分で形状が保たれている状態である。ゆえに発掘後は丁寧な対応や科学的処理が必要となってくることに触れる。木簡が非常に繊細なものであり、おかれた環境の変化（例えばそれまで木簡を守ってきた地下水脈が、道路工事などによって絶たれてしまうなど）によっては消滅してしまう可能性があることを指摘すると、生徒は非常に驚いた顔をする。史料という歴史的所産は、我々の日常的な生活に左右される部分があることを知っておくことも大事だと思われる。

④では、第一次大極殿の下層から和銅三（710）年三月の日付を持つ木簡が発見されたことから、平城遷都の段階でまだ平城宮は完成していなかったことに気づかせたり、平城宮跡の水路・土坑から木簡が発見されることなどを切り口に、廃棄状況の如何が木簡の内容を考えるうえで大きな意味を持つことなどを指摘する。

展開1は、Q & Aと講義の形で進む。生徒たちも少しずつ退屈してくる。そこで展開2では、積読作業を入れた。

木簡の写真は8つ用意した。漢文などの練習である習書木簡、中央への貢物につけられた荷札木簡、召喚状にあたる召文木簡、往還する人間からの情報を得るための告知札、下級官人の勤務評定である考課木簡、物品請求に関わる請文木簡を用意した。荷札木簡に関しては、地

元愛知県のものを出したが、佐久島でピンと来ない生徒がいたことは少なからずショックであった。なお作業に入らせるときに注意したのは、まず読める漢字を見つけて読んでいくこと・全体としてどのような内容を持つものかを考えることであった。原史料を生徒に読ませると、一字にこだわって先へ進めず投げ出してしまふことがあるからである。あとは『木簡字典』を参照させたり、画像で見せたり、漢字のつくりや文意などで考えさせたりさせた。

読ませると結構のめり込む生徒が多く、1時間目を終わってすぐ答え合わせ・・・と思ったが、そうはいかなかった。答え合わせは、教室の黒板に担当ごとに積文を書かせたこともあり、時間がかかった。

ゆえに④木簡の性格については、具体例をあげつつ、紙の正規に残された史料ではわからない史実を明らかに

時間	指導内容
導入及び展開1 30分	1、木簡とは何か プリントAを配布する ①発問「木簡とは何か」（定義の確認） ②木簡の発見 いつごろから見つかっているのか これまでにどのくらい見つかっているか ③木簡の伝来 木製品を長期保存できる環境とは 発掘後の処理はどのようにされているか ④出土文字資料としての木簡 文字史料→遺跡の性格。時期判定の材料 物質史料→廃棄時の状況を考慮する必要
展開2 20分 + 25分	2、木簡を読んでみる プリントBを配布する ①3～4人のグループに分けて、1～2の木簡を割り当てて読ませる （教員は机間指導。適宜『木簡事典』を参照） ②一定時間たったところで、黒板に積文を読めたところまで書かせる ③「答え合わせ」をする 積文の当否の確認。内容の理解。 ④木簡の性格について教員より指摘 意図して残されなかった内容 →そこから浮かび上がる新たな歴史像
展開3 及びまとめ 25分	3、木と紙 発問「木簡は紙の代用品というのは正しいのか」 →木であることを利用した使い方 例1 付札木簡 例2 考課木簡 例3 削りかす

できることを伝えたいのだが、要点のみを伝えるのが精一杯である。

展開3からは、再びQ&A形式である。読ませた8つの木簡の形状に注目させながら、木簡には、紙にはない機能があること、紙の記録を補う側面があることに気づかせる。

荷札木簡の端の切り込みは何のためにあるのか。ひもを用意して提示すると、生徒は気が付く。荷物に木簡を結わるための切り込みだと。では紙ではいけないのか。雨が降ったらどうなる？そのヒントで、木の丈夫さという側面に生徒は気が付く。告知札の下端がとがっていることも、その使い方もここでわかる。

また削りかすの木簡を見せる。なぜこんなものがあるのか？字を間違えた場合、今ならどうする？木に書いた字を間違えたらどうする？問いを重ねていくうちに、生徒も気が付いてくる。消しゴムでは消せないけど、木ならば削れば直すことができる、と。

教科書的な常識では、木は紙の代替品に過ぎない。でも実際には紙にはない機能を持っている。この知恵と発想の転換は、現代に生きる生徒たちにとっても、史料の文字内容に以上に有意義なメッセージだと思われる。ゆえにこの展開3は、落としたい内容なのである。

3. 成果と課題

授業後のワークシートを見ると、感想で多いのは「難しかった」であった。漢文になれていない（また木簡のなかには正しい漢文で書かれてないものもある）こと、異体字が多く使われていること、奈良時代の社会についての理解をそれほど持っていないこと、そもそもプリントにした写真画像が見づらいことなど、多くの困難がそこにはある。しかし、何かを読み解く・見つけるという作業は、生徒たちには楽しかったようで、「時間はかかったけど読めた時のすっきり感が非常にあってよかった！」「機会があればまた読みたい」といった感想が結構見られた。『木簡辞典』が手元にあることは、読解作業に大きくプラスとなった。

講義形式になってしまった展開1、3についても、生徒にとっては興味深かったようで、「昔の人の知恵はすごいと思った。けずれば何度もかけるという点も、見落としていた木の長所だと思った」という感想もあった。「たった一つの木簡で一度にいくつもの情報を得ることができるということを知り、感動しました」という感想をあげた生徒は、ワークシートの展開1・3の箇所丁寧に丁寧なメモを記していた。

前二回の授業と比して、大きな歴史的な問題を取り上げたわけではなく、純粋に古文書学的な授業だったわけだが、歴史学というと文字を読むことととらえがちな生徒の視点を広げるうえで意味のある授業だったのではないかと思う。

木簡については、大学院在学中に名古屋大学大学院文学研究科の古尾谷知浩教授にいろいろとお教えいただいた。その学恩をこのような形でしかお返しできないことにもどかしさを感じずにはいられないが、感謝の念を示したい。また本授業の構成にあたって参考にした文献としては、今泉隆雄『古代木簡の研究』（吉川弘文館、1998）、東野治之『正倉院文書と木簡の研究』（塙書房、1977）などがある。

